The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ガイガーカウンターと喜劇
Author(s)	辻, 明典
Citation	臨床哲学のメチエ. 2013, 20, p. 36-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24939
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ガイガーカウンターと喜劇

辻明典

墓参りをするために帰省した時、南相馬市のマークがついたガイガーカウンターが目に留まった。南相馬市は市内の全家庭に、ガイガーカウンターを無料で配布した。しかし、市民のなかには、「市が配布したガイガーカウンターは、放射線の値が低く出るので信用できない」と非難する人たちがいるようだ。私には、市が配布したガイガーカウンターが、精密な機能を有しているのかはわからない。特定の製品に備えられている性能について、詳細な知識を持っている訳でもない。市の対応を非難した住民が、科学的な手続きをふまえて射線を計測する方法を熟知しているのかもわからない。ただ、行政機構が配布したガイガーカウンターに対する不信が、市民の間に広がっているのは事実であるらしい。「市が配布した」という事実自体が、市民に不信感を生み出しているのだろうか。震災直後の不十分だった行政の対応が、現在まで尾を引いているのかもしれない。

行政に対する不信が、市民のなかに渦巻いている。放射線の値は、身体への不安を掻き立てるだけではない。それは福島に住む人たちの人間関係にも、影を落としはじめている。「心を一つに」「がんばろう福島」といった、当たり障りのないスローガンの下で、人びとの間には、不信と不安が渦巻いている。

福島県内の各地で放射線に関する講演会が、今でも開かれ続けているようだ。不安を和らげるための「心のケア」もあるらしい。「放射線を正しく理解する」といった言説もよく耳にする。でもそれだけでは、市民が行政に抱く懐疑の念も、市民相互に渦巻く不信感も、放射線に対する不安も、払拭される訳ではない。まして、それらと向き合うこともできない。

私には、福島県の浜通りに残っている友人たちがいる。その１人は、酒の席でこんなことを語っていた。

「俺は仕事には困ってねえな。あと２０年は仕事があるっていわれてる。」

いまは放射線の値を下げてほしい、除染をしてほしいという住民の依頼を受け、各世帯の屋根を取り替える仕事をしているらしい。

「（南相馬市の）小高の警戒区域が解除されたべした。瓦を取り替えるのに、（仕事で）小高さ行ってんだ。瓦は土だから、放射線を吸い込んでるみたいで、結構（放射線の値が）高いんだぞ、あれ。俺、瓦を取っ替えるとき、けっこう放射線吸い込んでんだろうな。でも、内部被曝なんか気にしてたら、仕事なんてできねえから。」

放射能の影響を気にしていたら、仕事などできない。それがこの町と、彼らを覆っている現実だ。彼は南相馬を離れたことはない。福島の復興を担うのは、地元に住む若い人かもしれない。でも、放射線の影響を強く受けるのも、復興を担うはずの彼らなのだ。

私には、南相馬で生きていく彼らが、アポリアを自身の内面へと還元することによって、バランスをとっているように見えてしかたがなかった。現状のままでは行き着く先は、心理主義の蔓延しかないようにみえる。

そういえば、こんなことを言っていた友人もいた。

「福島は、子育てができる環境じゃないと思ってる。自分の子どもも心配だけど、その次の世代がもっと心配。体のどこかに、なんか異常が見つかるんじゃないかと思って……」

何気なく、日常会話でこんな話題が出てくること自体が恐ろしい。放射能が身体へ与える影響への心配について

は、現在の世代だけにとどまらない。もし福島にとどまり育児をするのであれば、放射線が世代を超えて生み出し続ける不安を、否が応でも引き受けなければならない。

どんなに美しい言葉も、力強いスローガンも、震災後の福島には響かない。専門家や行政機構による「科学的」な説明を、多くの市民は不信感を持って眺めている。私たちは、震災後に生じたアポリアを、抱き続けていくしかない。問題は、アポリアをどう抱き続けていくかだ。原発事故に起因するアポリアから目を背けてはいけない。

福島の復興に関して、メディアや専門家から聞こえてくるのは、「復興のプランを示せ、道筋を示せ」という声ばかり。その声に、大衆規模で、方向性の定まらない憤りが重なろうとしている。そもそも、プランや道筋を示すのは誰なのか？ 復興のプランを示す人というのは、政治家や専門的知性を有する人たちなのだろうか？ 確かに、専門性を有した人たちでなければできない仕事があることは事実かもしれない。しかし、それでも、南相馬で生きざるを得ない人たちの声を無視することはできないはずだ。私や、私の友人たちの声は、本当に反映されているのか？ 反映することが可能な仕組みは、そもそもあるのか？

私たちの未来は既に、ある枠組みに填められてしまっていて、そこからはもう逃れられない。ある枠組みとは、拡散した放射能が残る世界に生きなければならなくなったという悲劇に尽きるが、それは私たちが、災害と災害の間に生きざるを得ないという事実でもある。私たちは災間に生き、その未来は破滅的事象によって定められてしまっている。

巷では、除染、除染の大合唱だが、除去された放射性物質はどこへ行くのだ？ 向日葵が大地から放射性物質を吸い上げるという噂を耳にしたが、その向日葵はどこへ持っていくつもりなのだ？ 高圧洗浄機で流しだされた放射性物質は、土に染み込み、川へ、海へと流れていくのだろうか？ 放射性物質が完全に消え去るのは、いったい何年後なのだ？ 私たちはもはや、放射能という呪縛から逃げ去ることはできない。だがそれは、今更になって明らかになったことではない。震災と原発事故が起こる以前から、警鐘を鳴らしてきた人は何人もいたし、それに耳を傾ける機会はいくらでもあったはずだ。私たちの未来は、既に放射能の作り出した枠組みに規定されてしまっていたのだ。それは破滅への序章によって、白日の下にさらされた。だがその悲劇の下、同時進行で信じられぬ喜劇が演じられている。私たちは、悲劇と喜劇が幾重にも重なり合うなかで生きているらしい。

喜劇とは何だ？ どれ、ちょっとばかり書いてみようか。この町から見える

喜劇の一つは、欺瞞的なスローガンや言葉に加え、それを支持しようとする大衆たちがつくりだしたものだ。彼らはどうしても、一つにまとまることが好きらしい。まあ、一つになることとはそもそも何なのか、何を意味するのか、考えたこともない輩が叫び続けているのだろう。そして彼らは、羅列されただけの、空虚な言葉が好むようだ。大人たちは勝手だ。枠に填められてしまった現実を見ようとはしない。それだけではなく、空虚な美辞麗句に綾取られた免罪符の下で、子どもたちの内面にアポリアを還元したいらしい。そして、心ない大人たちは、自分たちが喜ぶような言葉ばかりを、子どもたちに言わせようとしている。

ありがとう！ 感謝！ 地域への愛着！ 若者たちは未来を見据える！ 大衆受けする、括弧付きの美辞麗句ばかりが浮遊していて、それを青少年たちに上辺だけ語らせようとしている。模範的な少年少女は、しっかりと、喜劇を演じているようだ。でも、子どもらだって、人目の届かぬ場所で涙を流しているのかもしれないし、静かな憤りをその胸の奥に秘めているかもしれない。心ない大人たちには、そんなこともわからないらしい。欺瞞的なスローガンと主張ばかりが、人影の少ない町に空虚に響く。

しつこいと思われるかもしれないが、これだけは言っておきたい。「ありがとう」と言うのはいったい誰だ？ いったい誰が、どの人の、どの様な行為に対して、「ありがとう」と言うのだ？ 薄っぺらで、上辺だけの「ありがとう」の大合唱は、いったい何を生むというのだ？ 一度、頭を冷やして、考えてみるといい！ 悲劇と喜劇が重なり合う、この町で！

ある日、ふと○○さんの話題がでてきた。

「この人って、○○さんとこの次男だべ？」

「この人、確か昔っから、原発に反対してたよな。いま、県外に避難しているらしい。なんか、この人の主張が書かれた記事を、どっかの新聞で読んだなぁ。」

「ああ、だから○○さんとこの兄貴が、おらい（自分の家）にきたときに、なんかばつが悪そうな感じだったのか。」

「どういうこと？」

「自分の血縁者が避難してっこと、みんなには言いにくいんだべ、きっと。近所の人の目もあっから。昔から（原発に）反対してるんだったら、こういう時こそ、（南相馬市の）原町に残ってもらわないとなあ。」

南相馬市原町区は、他の地区と比べれば放射線の値が低いところが多い。しかし、放射線の値が低いにも関わらず、この地区から避難をした人も多い。放射線の値の高低によって、人びとの間に亀裂が生じ始めている。そして、放射線の値が低い土地に住んでいるにも関わらず避難をした人たちが、町に残った人たちから後ろ指をさされやすい雰囲気が醸成されている。

そんな状態のなかで、放射線の値が低い地区に住んでいたある年配の男性が南相馬市を脱出し、自らの政治的立場を全国的に表明したのだ。その男性に対する非難は、彼自身だけに向けられている訳ではない。哀しいかな、彼と血縁関係のある人びとにも冷徹な視線が向けられているようだ。

福島も、南相馬も、一つになんかならなくていい。放射線に対する見解も、被害状況も、原発に対する考え方も、全てが多様なのだ。多様性を前提とした上で、意見を摺り合わせることができる空間が必要だ。地縁と血縁によって老害ばかりが選出される議会と、出る杭は打たれる雰囲気に包まれている地方社会。民主主義が根付いていないこの地域に、対話の文化や、市民の声が直接に反映される仕組みが根付かなければ、この町に待ち受ける未来は絶望しかない。そうでなければ、行政機構や専門家に対する不信感だけではなく、住民同士の相互不信が渦巻く、荒んだ町になってしまう気がしてならない。いや、もはや絶望は、私たちの目と鼻の先で、大きな口を開けて

待っているし、そこに私たちは片足を突っ込んでさえいる。

少しずつでもいい。対話を始めなければ、人びとの間の隔たりはさらに深まり、不信と不満は募るばかりだろう。

◇つじ　あきのり
大阪大学大学院文学研究科臨床哲学博士前期課程修了。
こどもの哲に関心を持ち、学校における対話実践に積極的に関わっている。現在は福島県南相馬市立原町第二中学校の社会科の教員。